

子どもたちをわたしのところに

マルコの福音書 10章 13-16節

はじめに

今日の聖書箇所には、私たちが「子ども」をどのように見るべきかが教えられています。今日はこの後、「幼児洗礼式」もありますので、私たちが「子ども」をどのように見るべきなのか、特にイエス様を信じる私たちクリスチャンの子どもをどのように見るべきなのかを、聖書から学びたいと思います。

1. 神の国は、子どもたちのものである

13節には、「**イエスに触れていただくこと、人々が子どもたちを連れて来た**」とあります。ここに出てくる「人々」というのはイエス様を信じる人たちで、彼らは自分たちの子どもをイエス様のもとに連れて来たのです。そしてイエス様に手を置いて祈ってもらい（マタイ 19:13）、祝福していただくとしたのです。

しかし、それを見たイエス様の弟子たちは、彼らを叱ったのです。この「叱った」という言葉は、「怒鳴りつける」という強い言葉です。マタイの福音書を見ると、弟子たちが怒鳴りつけたのは、「**連れて来た人たち**」(マタイ 19:13)であったとあります。それはつまり、子どもたちの親です。弟子たちは、子どもたちを祝福してもらおうとイエス様のもとに連れて来た親たちを、怒鳴りつけたのです。

すると今度は、イエス様も憤ったと14節にあります。イエス様が憤ったのは、弟子たちに対してです。それは、弟子たちが子どもたちを、神の国から排除しようとしたからです。

イエス様は言われました。「**神の国はこのような者たちのものなのです**」。イエス様によれば、神の国は子どもたちのものです。しかしイエス様がここで神の国は子どもたちのものであると言われる、子どもたちというのは、一般的な子どもたちではなく、イエス様を信じる人たちに連れて来られた子どもたちです。つまりクリスチャンの親を持つ子どもたちです。

イエス様は、私たちイエス様を信じるクリスチャンの子どもたちは、神の国の一員であると言われるのです。

この地上で、神の国が最も豊かに現わされている所というのは、教会です。子どもたちが神の国の一員であるなら、子どもたちは教会の一員であるとも言えます。イエス様を信じる私たちクリスチャンの子どもたちも、教会の正式な一員なのです。だからこそ、私たちの教会は、クリスチャンの親を持つ子どもたちに、「幼児洗礼」を授けるのです。幼児洗礼を受けた子どもたちは、教会員となります。もちろん自分の口で信仰を告白するまでは、聖餐式に与ることはできない未陪餐会員ですが、それでも教会を構成する正式な一員なのです。

教会は決して大人だけのものではありません。教会は、イエス様を信じる人々と、その子どもたちによって構成されるのです。

また教会の中心は、礼拝です。教会が大人だけのものではなく、イエス様を信じる人とその子どもたちのものであるなら、礼拝もまた同じです。礼拝も決して大人だけのものではありません。礼拝は、イエス様を信じる人とその子どもたちのものです。子どもたちも礼拝に欠かすことのできない存在なのです。

私たちは決して子どもたちを、教会や礼拝から排除してはなりません。イエス様は、子どもたちを教会や礼拝から排除する者に対して、憤りを持たれるのです。イエス様は、イエス様を信じる私たちの子どもたちを、教会や礼拝の正式な一員として受け入れ、彼らを愛し、喜び、祝福されるのです。それこそが、私たちの教会が、子どもたちに「幼児洗礼」を授ける理由の一つです

2. 神様の約束は、私たちの子どもたちにも及ぶ

「洗礼」とは、神様の「契約のしるし」です。主なる神様が、私たちの神となってくださったことのしるしです。この契約のしるしは、旧約時代は「割礼」によって表され、新約時代は「洗礼」によって表されます。

この「契約のしるし」は最初、信仰の父であるアブラハムに与えられました。アブラハムが信仰によって義と認められたことのしるしとして「割礼」を受けるように命じられ、主なる神様がアブラハムの神となると約束されたのです。しかし「割礼」は、アブラハムだけでなく、子どもたちにも施され、主なる神様はアブラハムの神となるだけでなく、アブラハムの子孫の神となると約束されたのです。

旧約時代は、信仰によって義と認められた人とその子どもたちは、「割礼」を受け、イスラエルの民に加えられました。それゆえ新約時代も、信仰によって義と認められた人とその子どもたちは、「洗礼」を受け、教会に加えられるのです。

主なる神様が私たちの神様となってくださるといふ約束は、信仰を持ったその人にだけに限られるものではありません。神様の約束は、信仰を持ったその人と、その子どもにまで及ぶものなのです。私たちは、信仰を個人的なものと考えてはなりません。聖書を、旧約聖書から新約聖書まで一貫した書物として読むならば、信仰は決して個人的なものではなく、その子どもにまで及ぶものであることが分かります。私たちがイエス様を信じる時、神様は、私たちだけでなく、私たちの子どもたちをも祝福してくださるのです。主なる神様は、私たちの神となってくださるだけでなく、私たちの子どもの神となってくださると約束してくださるのです。それゆえ、イエス様を信じる私たちクリスチャンの子どもは、「契約の子」と呼ばれるのです。

パウロはこのように言いました。「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」(使徒 16:15)。私たちがイエス様を信じる時、神様は私たちの子どもをも救ってくださると約束して下さっているのです。

しかし私たちは、私たちがイエス様を信じた時に、自動的に子どもも救われていると考え
るべきではありません。私たちがイエス様を信じる時、私たちの子どもは特別な祝福の中
に入れられます。そして、やがて救われるという確かな約束の中に入れられるのです。

3. 「幼児洗礼」と「成人洗礼」

「幼児洗礼」と「成人洗礼」は、その洗礼が意味しているものは何も変わりません。洗礼
は、私たちが、①イエス様と一つに結ばれたこと、②新しく生まれたこと、③罪が赦された
こと、④神様の子どもとされていること、⑤永遠のいのちを与えられていることを表します。
洗礼の水は、私たちの一切の罪が、イエス様が十字架で流された血と聖霊によって、すべて
洗い清められたことを表します。

洗礼は「契約のしるし」です。洗礼自体に人を救う力はありません。洗礼を受けなければ
救われないわけではありませんし、また、洗礼を受けたからといって必ず救われるわけでも
ありません。

「成人洗礼」の場合は、救われたからこそ、その「しるし」として洗礼を受けます。しか
し「幼児洗礼」の場合は、救われるからこそ、その約束の「しるし」として洗礼を受けるの
です。洗礼は、「神様の約束のしるし」です。私たちは、主なる神様が「私たちの神となっ
てくださる、私たちの子どもの神となってくださる」、その約束を信じて洗礼を受け、子
どもに授けるのです。

「成人洗礼」の場合でも、洗礼を受けた後に、信仰から離れてしまう場合があります。そ
の場合も、洗礼は、「神様の約束のしるし」ですから、神様がその人を必ず信仰へと回復し、
救いに導いてくださると信じることができるのです。また私たちは、洗礼を受けても、生涯
の最後まで信仰を持ち続けていくことができるか不安になることもあります。しかし洗礼
は「神様の約束のしるし」ですから、神様が必ず私たちの信仰を生涯の最後まで守り、救い
に導いてくださると信じることができるのです。

「幼児洗礼」も同じです。洗礼は「神様の約束のしるし」ですから、洗礼を受けた子ども
を、神様が必ず信仰に導き、救いに導いてくださると信じることができるのです。

私たちは、神様の約束を信じて洗礼を受け、神様の約束を信じて子どもに洗礼を授けるの
です。主なる神様が私たちの神となり、私たちの信仰を守り、必ず救いに導いてくださる、
また神様が私たちの子どもの神となり、私たちの子どもに信仰を与え、必ず救いに導いてく
ださい、そのことを信じて洗礼を授けるのです。

しかし洗礼を受けた私たちも、また子どもも、自動的に信仰が守られたり、信仰が与えら
れたり、救われるわけではありません。信仰と救いは、神様が与えてくださった「恵みの手
段」を、私たちが忠実に用いることによって、与えられ、守られていくのです。

神様が私たちに与えてくださった「恵みの手段」とは、御言葉、聖礼典（洗礼・聖餐）、
祈りの三つです。私たちは、御言葉を読み、祈り、洗礼を受け、聖餐に与ることによって、
信仰が与えられ、守られていくのです。私たちは、御言葉も読まず、祈りもせず、洗礼も受

けず、聖餐に与ることもせず、信仰を守られ、救われることを期待すべきではありません。

また私たちは、子どもに御言葉を教えず、子どものために祈りもせず、子どもに信仰が与えられ、救われることを期待すべきではありません。

神様の約束は、私たちが神様の約束を信じて、その約束に応答していく時に、実現していくのです。

おわりに

イエス様を信じる時に与えられる神様の祝福は、決して個人的なものではありません。私たちがイエス様を信じる時、神様の祝福は私たちの子どもにまで及ぶのです。それが、旧約聖書から新約聖書に一貫して語られている「福音」の素晴らしさです。

私たちは、信仰を個人的なものと考えてはなりません。神様は、私たちの子どもにも救いの約束を与えてくださっているのです。主なる神様が、私たちの子どもの神となってくざると約束してくださっているのです。「幼児洗礼」を受けているいないは関係ありません。たとえ「幼児洗礼」を受けていなくても、私たちがイエス様を信じた時から、私たちの子どもは「契約の子」であることには変わりはないのです。

私たち子どもを持つ親たちは、子どものことで様々な心配をします。しかし私たちには、神様の約束があることを忘れてはなりません。主なる神様が、私たちの子どもの神となってくざり、子どもを救いに導いてくださるといふ約束があるのです。私たちはそれを疑ってはなりません。たとえ目に見える現実が、それとは程遠いように見えても、今は放蕩息子のよう見えても、神様の約束の確かさを信じなければなりません。

しかし神様の約束は、自動的に私たちに実現するものではありません。私たちが神様の約束を信じて、それに応答していく時に実現していくのです。私たちが子どものために祈り、御言葉を教え、洗礼を授けていく時に実現していくのです。イエス様は言われました。「**子どもたちを、わたしのところに来させなさい**」。私たちが子どもを、イエス様のもとに連れていく時に、神様の約束は実現していくのです。子どもを教会に連れて行き、礼拝に参加させていく時に実現していくのです。しかしある子どもは、すでに大きくなり、御言葉も聞かず、礼拝にも参加しなくなり、親の言うことも聞かなくなることもあるでしょう。しかし私たちには、祈ることはできます。私たちは、神様の約束を信じて、子どものために祈り続けなければなりません。諦めずに祈り続けていく時に、神様の約束は実現していくのです。

自分の子どもを救いたい、そう願うなら、まず私たち親が信仰をしっかりと持たなければなりません。私たち親が、まず洗礼を受け、毎週礼拝を守り、毎日聖書を読み、祈り、毎月聖餐に与かっていかなければなりません。私たちの信仰が曖昧なら、子どもたちへの神様の約束を確信できるはずがありません。

聖書は私たちに約束しています。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。私たちは、この約束を信じて、この約束に応答して、子どもたちをイエス様の所に連れて行かなければなりません。その一つの表れが「幼児洗礼」なのです。